資料

部分の総和を超える、全体としての形態

エルンスト・ユンガー　著
川合全弘　訳

〔訳者まえがき〕

本稿は、エルンスト・ユンガーの形態論を考察するための基本資料として、彼の著作『労働者』の第一部に収められた「部分の総和を超える、全体としての形態」という章を訳出したものである。底本には次の初版を用いた。Ernst Jünger, *Der Arbeiter. Herrschaft und Gestalt*, Hanseatische Verlagsanstalt, 1932, SS. 31-45. 強調のために著者が隔字体で表記した箇所は、本稿では太字のゴシック体で表わした。

『労働者』は全体で八〇節から成り、訳出した章は、このうち第七節から第一二節に当たる。著作の末尾に節毎の「概要」が付記されているので、読者の理解を助けるために、第一節から第七節までの概要を次に訳出する。「（一）第三身分の時代は見せ掛けの支配の時代であった。（二）労働者の諸運動に対して市民的模範を押し着せようとする点に、この時代を永続させるための努力が表現されている。（三）これに応じて、労働者は、ある特殊な階級、もしくは

ある特殊な身分として、（四）ある「新しい」社会の担い手として、（五）経済と運命とが同等であるような、ある世界の担い手として、見られている。（六）労働者を、総じて市民が想像しうるよりも一層高く一層包括的な地位において探し求める試みは、（七）ただ、労働者の外見の背後に、別種の独自な法則性に従う、独立自主の偉大な形態が察知されるときにのみ、可能となる。」

七

今提出された問題[1]に答えるためには、形態として理解されるべきものは何なのか、ということを明らかにする必要がある。これを解明することは、たとえここではそれにわずかのスペースしか割けないとしても、決して傍注の類に属するわけではない。

以下においてまずは複数形としての諸形態について語るとしても、それはさしあたり序列が欠けているからである。この欠陥は研究の経過とともにいずれ是正されよう。形態の国において序列を決定するものは、原因と結果の法則ではなく、印鑑と印影という別種の法則である。やがて我々は、我々が踏み入りつつある時代に、空間と時間と人間それぞれの表現が唯一の形態、すなわち労働者の形態へと帰着する様を見ることになろう。

さしあたりこの秩序と無関係に、眼前に現われる諸々の事物を形態と呼んでみるとするならば、そこには世界が原因と結果の法則よりも一層厳格な法則に基づいて統合され、しかもそれにもかかわらずこの統合過程の焦点たる統一性が人の目に触れることはない、という意味合いが含まれているのである。

訳註

① 第六節末尾で提起された――「労働者の形態には従来察知されえたものを超えるものが潜んでいないのか」という――問いを指す。

八

形態の中に存するものは、部分の総和を超える全体である。解剖学的時代にはそれに到達することができなかった。人々が再び形態の魅力の下で見、感じ、行動するということが、始まりつつある時代の兆候である。精神の地位、目の価値は、それらに形態の感化が反映されている度合いによって決定される。最初の意義深い努力がすでに存在する。芸術にも学問にも信仰にも、こうした努力は見逃せない。政治においても、概念や理念や単なる外見でなく、形態を戦わせることに全てが懸かっている。

人が形態において体験する瞬間から、全ては形態となる。それゆえ形態は既知のものに加えてさらに発見されるべき新たな事物なのではなく、むしろ目が新たに見開かれたときから、世界は諸形態とそれらの関係の舞台として現われるのである。このことは、――過渡期に特徴的な誤解なのだが――例えばあたかも個々人が消滅して、自らの意義をもっぱら上位の統一体としての団体、共同体、理念から受け取らなければならなくなるかのような事態として、考えられるべきではない。個々人においても形態は示される。個々人の指の爪や各原子はことごとく形態である。ちなみにすでに今日の学問は、原子をもはや最小の部分としてでなく、むしろ形態として見始めているのではなかろうか。

部分の総和が形態を生み出すことができないのと同様に、一つの部分はもちろん形態ではない。人間という語を決まり文句を超えた意味において用いようとするとき、このことが顧慮されるべきである。人間は、具体的で把握可能な

個々人として理解されるかぎり、形態を持つ。しかしこのことは、単に悟性の様々な紋切り型の一つにすぎない人間、特定の何かを決して意味することができない人間には、全く当てはまらない。

諸個人が所属するところの一層広範囲に及ぶ諸形態についても、同じことが言いうる。この帰属性は掛け算によっても割り算によっても算出されえない。言い換えれば、人間が多数いるという事実だけで形態は生まれないし、また形態を分割すれば元の諸個人に戻るわけではない。というのも形態は、部分の総和を超える全体であるからである。人間は、人間を構成する原子、四肢、臓器と体液の総和を超え、夫婦は男と女を、家族は夫と妻と子供を超える。友情は二人の男を超え、また民族は人口調査の結果や政治的な投票の合計などによって表現されうるものを超える。

一九世紀には、このような超過分、このような全体性[1]を引き合いに出そうとする精神はことごとく、より美しい世界には向いているものの、現実の世には相応しくない夢の国に追放されることが慣わしであった。

しかし、まさしくその逆が現今の評価であること、そして政治的な領域でもこの超過分に対する目を持たない精神は低い地位に立たされることについて、もはやいささかの疑いもありえない。そのような精神が精神史や経済史や思想史において役割を演じることはありえよう。しかし歴史はそれらを超えている。歴史は、諸形態の運命の物語であるのと同様に、それ自体が形態である。

もちろん――以下のような解説を挿入することによって、形態という語の下に何が理解されるべきかということを一層鋭く示すことができるかもしれない――、生の論理学者と数学者とに反対する人々の大半もまた、自分たちが戦う相手と全く地位の異ならない次元に終始してきた。というのも、切り離された悟性や切り離された経済や切り離された人間を引き合いに出す代わりに、切り離された魂や切り離された理念を引き合いに出しても、何の相違も生まれないからである。このような意味における魂や理念が形態であるわけでもなければ、またそれらと肉体ないし物質との間に説得

力のある対照性があるわけでもない。

死に際して魂が肉体の宿を、それゆえ人間の不滅の部分が滅する部分を離れるとする、ありきたりの観念に従う死の経験は、そのような対照性と相容れないように思われる。死にゆく人間が自らの肉体を離れるという考えは、やはり誤りであり、奇妙な説である。むしろ人間の形態が、空間的時間的因果論的なあらゆる比較の及ばない、ある新しい秩序に歩み入る、と考えられるべきなのである。我々の先祖の考え方はこのような判断に基づいていた。それによれば、戦士は死の瞬間にヴァルハラへと導かれるのであるが、戦士はそこに魂として迎え入れられるのでなく、むしろ――戦場における英雄の肉体がその高度な比喩となるような――光り輝く肉体性を伴って迎え入れられるのである。

屍は決して魂の抜けた肉体でないという事実の十分な自覚へと、我々が再び到達することが非常に重要である。死の瞬間の肉体とその直後の屍との間には、わずかの関係も存在しない。このことは、肉体がその構成要素の総和を超えるのに対して、屍はその解剖学的諸部分の総和に等しい、という事実を見れば分かる。魂が炎と同様に塵と灰を後に残す、という考えは誤っている。最も重要なことは、形態が火と大地のエレメントに服さないこと、それゆえ形態としての人間が永遠に属すること、これなのである。人間の形態の中に存するもの、それは、単に道徳的にすぎぬ評価ともいかなる救いともどんな「刻苦勉励」とも全く係わりのない、人間の生来にして不変不滅の功績、人間の最高の実存、そして人間の最深の証明である。運動にますます献身すればするほど、我々は一層切実に次のことを確信せざるをえなくなる。すなわち、静止する存在が運動の背後に隠れていること、そして速度の上昇はことごとく不滅の祖語の翻訳にすぎないこと、これである。

このような自覚から、人間に対するある新しい関係、一層熱烈な愛と一層すさまじい冷酷さとが生まれる。最も厳格な秩序と一致する、明朗なアナーキーが生まれる。すでに数々の大戦闘と諸々の巨大都市とにおいて暗示されたような

光景がそれである。それらのイメージとともに今世紀は開幕した。この意味においてモーターは現代の支配者ではなく、むしろシンボルであり、爆発と精密さとを何ら対立と感じない力の象徴である。モーターは、喜んで自らを空中に吹き飛ばすことができ、しかもこの行為に秩序の証明を認めるようなタイプの人間の大胆な玩具である。観念論によっても唯物論によっても実現できず、**英雄的現実主義**と呼ばざるをえないこの態度から、我々が必要とする、あの極度の攻撃能力が生まれる。それの担い手は、大戦を喝采とともに歓迎し、それに続いた事柄や今後続くであろう事柄を全て歓迎する、あの志願兵タイプの人間である。

個々人もまた、先に述べたように、形態を持つ。個々人が石や植物や動物や星と共有する、最も崇高にして失われることのない生の権利は、形態への権利である。形態としての個々人には、その能力と素質の総和を超えるものが含まれる。そのような個々人は、本人が自らの最も深い思考において描くことができる自己像よりも一層深く、また本人が自らの最も力強い行為を通じて表現できる自己像よりも一層力強い。

このように個々人は尺度を自らの内に持つ。個々人が**個々人**として生きる限り、最高の生活術は、自己自身を尺度とすることにある。このことが一人生の誇りと悲哀を成す。人生のあらゆる偉大な瞬間、青年の燃えるような夢、愛の陶酔、戦闘の炎は、形態のより深い自覚と一致する。**想起**とは、心を揺さぶり心にこれらの瞬間の不滅性を刻み込む、形態の魔術的な帰還である。一人生の最も辛い絶望は、自らを充実させられなかったこと、自己本来の力を発揮できなかったことにある。この点で個々人は、――どれほど大きなものであれ、小さなものであれ――自分の遺産を異郷で無為に浪費してしまった、見捨てられた息子に似ている。しかしそれにもかかわらず、彼が祖国に再び受け入れられることについては、全く疑い得ない。というのも、個々人の失われることのない遺産とは、個々人が永遠に属すること、そして疑う余地のない最高の瞬間において個々人がこのことを十分に自覚すること、これであるからである。このことを

時代の中で表現することが、個々人の使命である。この意味において個々人の生は形態の比喩となる。

しかしながらさらに、個々人は諸形態の偉大な序列の中に組み込まれてもいる。これらの諸形態は、現実的にありありと十分に想像することが全くできない諸力である。これらに向かえば、個々人自体が比喩となり、代表となる。そして個々人の生の重み、豊かさ、意味は、個々人が諸形態の秩序と争いとに参与する度合いに依存する。

真の形態は、それに対して全ての能力が捧げられ、最高の敬意が注がれ、極度の憎しみが寄せられることによって、識別される。真の形態は、自らの内に全体を秘めているので、全体を要求する。こうして、人間が形態とともに自らの使命、自らの運命を発見することになるのであり、そして戦死にその最も重要な表現を見出しうる犠牲行為を人間に可能ならしめるものは、この発見である。

原註

（1）以下においてさらにある役割を演じることになる、〝全体的〟という語のより詳細な説明については、「総動員」（ベルリン、一九三〇年）という論文を見られたい。

九

労働者を形態によって定められた序列において見ることが、市民時代には叶わなかった。というのも、この時代には形態の世界に対する真の関係が存在しなかったからである。そこでは全てが融解して理念や概念や単なる現象と化してしまったのであり、この液状空間の両極は理性と感傷性とであった。希薄化の最終段階にあって、ヨーロッパには、そして世界には、今日なおこのような液体、すなわち独裁的となった精神という色あせた塗料が溢れている。

しかしながら我々の知るところでは、このようなヨーロッパ、このような世界はドイツにおいて――最良の心が、いやそれどころか最良の頭脳がその管理を任務としたことがない――単に一地方の地位しか持たない。すでに今世紀早々にドイツ人がこのような世界に対して反乱を起こし、しかもそれが真の形態の担い手たるドイツ前線兵によって支持される姿が目撃された。これは、すでに一九世紀に偉人たちによって予告された、そしてもっぱら形態の革命として理解されうる、**ドイツ**革命の開始でもあった。それにもかかわらずこの反乱が単に序幕にすぎなかったとするならば、その理由は、それが全体としてなお形態を欠いていたことにある。帝国のあらゆる国境で日夜孤独に人知れず倒れた兵士はいずれも、すでにこの形態の比喩であった。

反乱が形態を欠いた理由は、第一に帝国指導層が、結束してドイツに自らの最も危険な敵を見出していた一世界の諸価値に、大いに満足し、大いに納得していたからである。それゆえ、この指導層が敗北を喫し、抹消される一方で、ドイツ前線兵が単に不敗であるばかりでなく不滅でもあると実証されたことは、正義に適っていたのである。今日これらの戦死者はことごとく以前にもまして生き生きとしており、それは、彼らが形態として永遠に属することに由っている。しかし市民は形態に属さない。それゆえ市民は、たとえ王侯の冠や将帥の緋衣で身を飾ったとしても、時間に蝕まれるのである。

しかしさらに、すでに見たように、労働者の反乱が市民的思考の学校で準備された、という第二の理由が加わる。それゆえ労働者の反乱はドイツの反乱と一致することができなかったのであり、このことは次の事実に示されているのである。すなわち、ヨーロッパに対する降伏、世界に対する降伏が、一方で旧式の市民的な上層階級によって、他方でいわゆる革命の、同様に市民的な代弁者によって、それゆえ根本的には同一タイプの人間の代表によって遂行されたこと、これである。

しかしドイツにおいて、ドイツに敵対する反乱は決して新秩序の地位を得ることができない。それは、ある法則性に反するという理由からして、最初から挫折を宣告されている。いかなるドイツ人も、自らの力の最も深く秘められた根を剥奪されることなしに、この法則性を逃れることはできないのである。

それゆえわが国では、同時にドイツ的責任の担い手でもある勢力だけが自由のために戦うことができる。しかし市民は、自らが関知しないこの責任を、どうして労働者に伝えることができたであろうか。市民は、**支配の座にあった**ときに民族の根源力を出動させることができなかったのと全く同様に、支配権の**獲得に努めた**ときにもこの根源力を革命的に動員することができなかった。それゆえ市民は、それを運命に対する自らの裏切りに関与させようとした。

この裏切りは、大逆罪（Hochverrat）としてのその特性においては重要性を持たない。なぜならそれは、この点において市民的秩序の自己否定過程として見られなければならないからである。しかしながらそれは、市民が帝国の形態をもこの自己否定の中に含めようとした点において、売国行為（Landesverrat）でもあった。死の技法を持たないがゆえに、市民は是が非でも自らの死の時点を先に延ばそうとした。市民の戦争責任は、市民が戦争を本当に、言い換えれば総動員の意味において遂行することも、戦争に負けること――それゆえ没落に自らの最高の自由を見出すこと――もできなかった、という点にある。市民と前線兵とを分かつもの、それは、市民が戦争においてももっぱら交渉の機会を探し出そうとしたのに対して、兵士にとっての戦争は兵士がそこで死ぬに値する、すなわち帝国の――我が身を捧げてでも残さなければならないあの帝国の――形態が確証されるように生きるに値する空間を意味したということ、これである。

一方は是が非でも交渉しようとし、他方は是が非でも戦おうとする点で見分けられる、二種類のタイプの人間が存在する。労働者に対する市民の教育術は、労働者を自らの交渉相手へと育てる点にあった。この教育術の背後に潜む意

味、すなわち市民社会の存続期間を是が非でも延ばそうとする願望は、この社会が勢力の均衡に外交における自らの似姿を見出しえた限り、隠され続けることができた。このような均衡観に孕まれる、国家と対立する傾向は、これら諸勢力が交渉とは異なる関係に立ち入った瞬間に露呈せざるをえなかった。それにもかかわらずヨーロッパの最後の勝利は、市民が、――そこから見れば形態と運命が無意味なものと同義に映る――あの空間をもう一度実現することに手を貸した。そのような空間の存続、ヨーロッパの存続が市民の最も内奥に隠された理想像であったということが、ドイツ敗戦の秘密である。

市民が労働者に対して割り当ててきた不名誉な役割もまた、いまやこうして白日の下に晒される。市民は、内政において非常に巧みに労働者も支配の意識を持てるよう工作しえたものの、外交上の債務関係に照らしてみれば、このような支配主張は所詮不渡り手形にすぎないという実態がたびたび露呈せざるをえなかったからである。抵抗の期間は市民社会の最後の生存期間でもある。そしてこの点にも、とっくの昔に使い果たされた一九世紀の資本に依拠しようとする、市民社会の見せ掛けの存在が現われている。

しかしこれは、労働者があえて向こうにまわして戦う必要のない空間である。というのも労働者は、ここでは今後とも交渉と譲歩以外のものに出会うことがないからである。労働者はむしろこの空間を侮蔑とともに振り払うだけでよい。それは、外部との境界を無力さから入手し、内部の秩序を裏切りから入手する空間である。この空間とともにドイツはヨーロッパの植民地、世界の植民地となったのである。

さて労働者がこの空間を振り払う行為は、まさしく、労働者が自らを、形態として、また諸形態の序列の内部において、認識する、という点にある。国家のための闘争を正当化する最も深い根拠は、ここにある。このような正当化は、いまや新たな契約解釈でなく、むしろ直接的な委託、すなわち運命を引き合いに出さなければならない。

一〇

形態を見ることは、ある存在をその生の全体的で統一的な豊かさにおいて認識することである限り、革命的な行為である。

道徳的美的評価も学問的評価も超えたところで遂行されるということに、この行為の大いなる優越性が存在する。このような領域で重要なことは、あるものが善か悪か、美か醜か、誤か正かということでなく、それがいかなる形態に属するのかということである。これによって、一九世紀に正義の概念の下に理解されていたもの全てと全く相容れないような仕方で、責任の範囲が拡大する。すなわち個々人がどの形態に属するのかということが、個々人の身分証明となったり、また罪となったりするのである。

このことが認識され承認される瞬間に、非常に人工的となった生が自らを保護するために作った、あの恐ろしく複雑な装置は機能麻痺に陥る。なぜなら、我々がこの研究の冒頭で野生の無垢と特徴付けたあの態度は、もはやそのような装置を必要としないからである。これは存在による生の修正であり、生の新たな一層大きな可能性を認識する者は、容赦なく遂行されるこの修正を歓迎する。

新たな一層大胆な生を準備するための手段の一つは、解き放たれて独裁的となった精神の評価を否定すること、市民時代に人間に行使されてきた教育作業を破壊することにある。このことが、決して世界を一五〇年ほど以前の時代に戻そうとする一種の反動としてでなく、むしろ徹底的に遂行されるためには、この学校を最後まで通過してしまうことが必要である。いまや重要なことは、次のごとき捨て身の確信を持つタイプの人間を教育することなのである。すなわち抽象的な正義や自由な研究や芸術家的良心などの主張は、市民的自由の世界内部で一般に認められうる審級よりも一層

高い審級の前で自らを証明しなければならない、という確信がそれである。

このことがまず思考において遂行されるとするならば、それは、敵とは敵の得意分野で戦うべきである、という理由からである。生に対する精神の大逆への最善の応答は、精神に対する精神の大逆である。この爆破作業に参加することは、現代を高度にそして残酷に活用することの一環をなす。

一一

形態の視点からの労働者の観察は、市民的思考がそこから労働者の**概念**を得たところの二つの現象、すなわち共同体と個々人を出発点とすることも、やろうと思えばできる。これらの共通点は、一九世紀が人間について抱いた観念にあった。これら二つの現象は、人間の新しいイメージがそれらに投入されるようになると、その意義を変える。

それゆえ英雄的な観点の下では、どのようにして個々人が、一方で労働の戦場において殲滅される無名兵士として現れ、そしてまさしくそれゆえに他方で世界の主人及びリーダーとして、すなわち従来単にぼんやりと予感されるだけであった絶対権力を持つ命令タイプとして登場するか、ということを追究することは、しがいのあることであろう。両側面はともに労働者の形態に属する。このことは、両側面が激しい戦いの中で互いに等しくなり、ついに最も深いところで一体化する、ということを意味するのである。

同様に共同体は、一方でその重みに比べれば最高のピラミッドでさえピンの先端に過ぎないと思われるほどの巨大な事業の担い手である限りにおいて、苦悩する統一体として現われ、そしてしかも他方では、その意味がまさしくこの大事業の存廃に懸かる重要な統一体として現われる。それゆえ、この大事業の必要性が運命と化しさえし、もはやあらためて議論するまでもないのに、わが国では、この大事業を支え、またそれを治めるための秩序がどのようなものである

べきかということが、依然として議論されているのである。

このことはなかんずく次の点に、すなわち従来の労働者運動においてさえ**労働**が基本的事実であることを否定する傾向が一度も生まれたことがない、という点に表現されている。市民的思考の学校で育まれた運動がすでに権力を獲得したところでさえ、労働の減少ではなくその増加が直接の結果であったということは、精神を注意と確信で満たさざるを得ない現象である。このことは、さらに詳論されるべきことであるものの、一面ですでに労働者という名称自体が、自らの任務を、それゆえ自らの自由を労働に見出す態度以外の何ものをも示唆しえない、ということに由る。しかし他面で、ここに非常に明瞭に現われているものは次のような事実である。すなわち、抑圧ではなく、ある新しい責任感が本質的な原動力であること、本物の労働者運動は、かつて市民が――肯定の意味か否定の意味かは別として――そう解釈したような、**奴隷**としてでなく、むしろ偽装した支配者運動として解釈されうること、これである。これを認識した者は誰でも、人間を労働者という称号の使用に値する者たらしめる、ある態度の必然性をも認識する。

それゆえ、共同体と個々人とが形態の視点の下でも把握されうるとしても、やはり両者を我々の観察の出発点とするべきでない。形態の視点の下では、もちろんこれらの言葉の内容は変化する。労働世界の内部にある個々人と共同体とが一九世紀の個人と大衆とからいかに隔たっているかということを、我々は見ることになろう。我々の時代は、理念と物質、血と精神、権力と法などという別の対置と並んで、このような対置に労力を費やしてきた。これらの対置からは、あれこれの部分主張を露出する遠近法的解釈しか生まれない。はるかに重要なことは、労働者の形態を、そこから見れば個々人も共同体も比喩として、代表として把握されうるような地位において探し求めることである。この意味における労働者の代表は、夙に超人[2]において予感されたような、個々人の最高度の高揚でもあり、また大事業の呪縛の中で蟻のごとく生活する共同体でもある。この共同体の側から見れば、個性の主張は私的領域の無資格の表明と見なされ

る。これら二つの生活態度は民主主義の学校の中で発展してきた。両者について言いうることは、両者が民主主義の学校を卒業し、見掛けは対立する二つの方向からいまや古い評価の否定へと近づいている、ということである。しかし両者は、すでに述べたように、労働者の形態の比喩である。それらの内的な統一性は、全体的独裁への意志が、ある新しい秩序の鏡に映せば、総動員への意志として認識されるということを通じて、証明されるのである。

しかし秩序というものは全て、それがどういう種類のものであるにせよ、――地図の上に引かれ、自らが指し示す地域を通じて初めて意味を持つ――経緯度線に似ており、また――精神にとっては、記念碑を通じて感銘を受けるだけでよく、あえて思い出す必要もない――諸王朝の変遷する名前に似ている。

こうして労働者の形態はまた、あらゆる比喩と秩序よりもさらに深くさらに静かに存在の中に埋め込まれる。それは、比喩と秩序を通じて、体制や大事業よりも、人間とその共同体よりも、一層深く自己を証明する。後者は、その根本性格を変えない顔そのものではなく、絶えず変化する顔の表情に似ている。

原註

（2）　しかもこれは市民的個人という媒体を突き抜けた後に生まれる。

一二

その存在の豊かさにおいて、そしてまさに今始まった刻印の力において見られるならば、労働者の形態は、矛盾と緊張をうちに孕みつつ、しかも驚くべき統一性と運命的なまとまりとを保って、現われる。こうしてそれは、いかなる目的もいかなる意図も意識を妨げることのない瞬間に、静止し予め形成された力として、時折我々の目に見えるようにな

る。

こうして、我々を取り囲むハンマーと歯車の轟音が突然沈黙するとき、過剰な運動の背後に隠れていた静寂が、時にほとんど肉体的な仕方で我々の前に姿を現すように思われることがある。現代において、死者を顕彰するために、あるいは歴史的な意義のある瞬間を意識に刻むために、最高の命令を受け取る折のように、数分間、作業を止めて不動の姿勢を取ることは、良いしきたりである。というのもこのような運動は、例えばある動物の秘密の意義が動物の運動の中に最も明瞭に現われるというような意味において、最も内奥の力の比喩だからである。しかし運動の静止についての驚きは、根本的には、耳がある瞬間に、運動の時間的進行に動力を与える、一層深い源を聞き取ろうとする、という事実についての驚きなのであり、このことがこのような行為を礼拝的な地位にまで高めるのである。

進歩の大いなる学校の特徴は、根源的な力との関係を欠いていることであり、またその活力が運動の時間的進行に基づいていることである。このことは、それの結論が、内発的に、そしてあたかも悪魔的な数学に導かれるようにして、ニヒリズムに合流することを運命づけられている理由である。我々は、進歩に関与した限り、このことを身をもって体験したのであり、それゆえ、現実との直接的な結びつきを再建することを、長らく根源的景観の中で暮らした世代の偉大な使命と考える。

現実に対する進歩の関係は派生的な性質のものである。認められることは、現象の周辺への現実の投影である。このことは進歩の大いなるシステム全てに即して証明されうるし、また労働者に対する進歩の関係についても妥当する。

とはいえ、啓蒙主義が啓蒙よりも深いのと同様に、進歩もまた背景を持たないわけではない。進歩もまた、先に述べたような瞬間を知っていた。論理的起源を超えたところに由来する、認識の陶酔というものが存在し、また技術的な成果に対する誇り、空間に対する無制限の支配の開始に対する誇りが存在する。これらには権力への最も秘められた意志

がおぼろげながら姿を現わしている。この意志にとってこれら全ては、いまだ予期されざる闘争と反乱の準備にすぎず、そしてまさしくそれゆえに非常に貴重であり、またかつて戦士が自分の武器を扱ったときよりも一層心のこもった手入れを必要とするのである。

それゆえ我々にとって、進歩に対してロマン主義的イロニーという下位の手段を対置しようとする、そして核心において衰弱した生の確かな特徴でもある、あの態度は、問題にならない。我々の任務は、時代の反対者たることではなく、むしろ、金額の点でも意気込みの点でも全てを時代に賭ける、一か八かの勝負師たることである。我々の父たちが非常に辛辣な仕方で切り取った断面は、より大きな像の中で見られるならば、その意義を変える。快適と安全へと通じるかに思われた道を延長していくと、いまやそれは危険なものの領域へと入り込む。このような意味において労働者は、進歩が労働者に割り当てた断面を越えて、新たな生を決定づける英雄的な基質の担い手として現われる。

さてこのような資質の作用を実感するとき、我々は労働者に近づくのであり、またそれが我々の遺産に属するかぎり、我々は労働者である。我々が我々の時代について驚異的と感じ取るもの、そしてはるか後世の伝説においても我々を力ある魔法使いの一世代として登場させるものの全ては、この資質に属し、労働者の形態に属する。我々がそこに生れ落ちたというだけで奇異に感じない我々の光景の中に作用しているもの、それが労働者の形態である。それの血が、車輪を回し、車軸で煙を上げる動力用燃料である。

ラマ教の回転礼拝器に埋もれた広野を思わせる、この単調な運動、ピラミッドの幾何学的輪郭に似たこの厳格な秩序、そしてどんな異端審問もモロクも要求したことがないようなこの犠牲者、一歩進む毎に恐るべき確実さで増え続けるこの犠牲者を観察するならば、**現実的**に見る術を心得た目の持ち主は、現代の闘争の下に展開する原因と結果のヴェールの背後に、運命と崇拝が働いている、という洞察を、いかにして回避できるであろうか。